

ヨハネ第一4章7-10節 「神は愛」

1A 神から出る愛 7-8

1B 兄弟愛 7

2B 神の本質 8

2A 御子の派遣 9-10

1B いのちの付与 9

2B 宥めのささげ物 10

本文

ヨハネの手紙第一 4 章を開いてください、今晚は 7 節から 10 節までを見ていきます。「⁷愛する者たち。私たちは互いに愛し合しましょう。愛は神から出ているのです。愛がある者はみな神から生まれ、神を知っています。⁸愛のない者は神を知りません。神は愛だからです。⁹神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちにいのちを得させてくださいました。それによって神の愛が私たちに示されたのです。¹⁰ 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」ここに、「神は愛です」という、とても有名な、大切な言葉が出てきます。神は愛、という言葉を念頭に置きながら、この箇所を眺めていきたいと思います。

ヨハネは、3 章 23 節で、神の命令が何であるかを端的に言いました。「**私たちが御子イエス・キリストの名を信じ、キリストが命じられたとおりに互いに愛し合うこと、それが神の命令です。**」一つが、信じること。もう一つが互いに愛し合うことです。それで 4 章において、ヨハネは、信じることについて詳しく説明しています。1 節から 6 節までで説明しました。肉をもって来られた、イエス・キリストを告白する霊はみな、神からのものだということです。神を信じているというだけでは足りず、イエス・キリストを告白しています。そしてイエス・キリストを告白していても、この方が肉体を取って来られたといことを信じて告白しているか、どうかであります。

これは、互いに愛し合いなさいという命令にも深く関わっていることですね。肉体を持って生活をしている私たちが、目に見える形で、口先だけでなく、真実と行いをもって兄弟を愛しているかどうか？に関わっています。イエスは肉体を取られて、その肉体をもって私たちを愛されました。身体を動かし、人に触れ、語りかけ、そして犠牲を払います。その触れ合いの中に、真実の互いの愛があります。

興味深い逸話があります。修道僧が籠って瞑想をしている時に、サタンが彼に現れました。自分はイエス・キリストだということです。それで修道僧は、釘に刺された跡を見せてくださいと言います。

すると、サタンが消え去りました。キリストがその肉体にあって死なれたのだというのは、神が確かに肉体を取って現れたことの証拠になるのです。復活された後に、弟子トマスに対して主は言われましたね。「ヨハ 20:27 あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしの脇腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」そして、トマスはイエス様に、「私の主、私の神」と言いました。肉体を取られた神です。

そして 4 章 7 節から 12 節までで、兄弟を互いに愛する命令について、さらに掘り下げます。今晚は、その前半 7 節から 10 節までを見ます。

1A 神から出る愛 7-8

1B 兄弟愛 7

7 愛する者たち。私たちは互いに愛し合ひましょう。愛は神から出ているのです。愛がある者はみな神から生まれ、神を知っています。

ヨハネは、彼らのことを愛していることを、「**愛する者たち。**」と言って呼びかけています。そして同じように、あなたがたもしなさいと呼びかけています。「**私たちは互いに愛し合ひましょう。**」とのことです。これまでも、互いに愛しなさいという命令を何度となくこの手紙で教えていました。その理由や目的が、その度に書かれていますね。

初めに 2 章 7 節から 11 節までにありました。そこでは、キリストの命令で、これを新しい命令として書きますと言い始めています。それはあたかも、イエス様が山上の説教で、「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。」という言葉から、イエス様はいわば、「神の国宣言」をしたようなものです。神の国はこのようなものだ、だからあなたがた、わたしの弟子はこの中に生きなさいというものです。それと同じように、イエス様は弟子たちに愛の大命令を与えられました。「ヨハ 13:34-35 互いに愛し合ひなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合ひなさい。互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるようになります。」

教会は、多かれ少なかれ、宣教の大命令の使命を負っていますね。すべての国民をわたしの弟子としなさいという命令です。しかし、その命令の中に生きて行こうとするなかで、まるで会社の業績であるかのように、ノルマを果たすかのようにして伝道活動やその他の活動に邁進することがあります。しかし、人々がイエス様を信じることと同じぐらいに、互いに愛し合うことが大命令として与えられているのです。それが大きな使命であり、結果として宣教命令を果たすことにもなります。つまり、すべての人が、私たちがキリストの弟子であることを認めるようになるということです。あたかも、私たちには愛することが、付加的に与えられているもの。「イエスを信じさせるのが第一命令で、愛も忘れないようにね！」みたいに、頭の中ですり替えが起こっていることがあります。い

いえ、互いに愛し合いなさいは、信仰と共に、神の国における大命令なのです。

そして、3章10節から、再び兄弟を愛することについてヨハネは書いています。そこでは、「兄弟」と呼んでいる所以を語っています。何を以て兄弟なのか？同じ、神から生まれた、神の子どもということで兄弟なのです。神の子どもとは、神から生まれた者であり、「神の種がその人のうちにとどまっているから」だと言っています(3:9)。ちょうど、DNAが親から受け継がれるように、自分のうちに神のDNAがあるから、罪を犯したままでいることはできず、ゆえに兄弟を愛さないままでいることはできません。

そして、ここ4章7節は、「愛は神から出ているのです。」といことで始まります。その神の本質は愛であり、神から出ているのであれば、愛する者なのだということです。愛するということは、神から出ているものなのだということです。つまり、私たちが神から生まれ、その新しい性質をいただいているから、愛することができるということです。人としての自分は、罪の性質のゆえに、自分を愛するけれども、隣人を愛することができません。しかし、御子はその罪を取り除くために現れました。また人を憎むという悪魔の仕業を打ち破るために、世に現れました。しかし、罪が取り除かれ、悪魔の仕業も打ち破られた今、神の愛が御霊によって私たちに注がれます。そして、その愛によって兄弟を愛するのです。

私たちは、「兄弟を愛する」という命令を聞くと、大体、こんなように考えます。「イエス様が愛された。この方を見倣って、兄弟を愛さなければいけない。」お手本にして、自分で愛していこうとします。もちろん、私たちの主が私たちの手本です。けれども、その原動力、源はどこなのでしょう？自分自身になっていることが多いのです。自分自身が何とかして、兄弟を愛そうとしています。けれども、そこで肝心のことを忘れていきます。イエス様の命令は、「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」でありました。イエス様が自分のために命を捨てられた、その愛が自分に留まっていた、その愛でもって愛することなのです。自分自身が愛するというよりも、キリストの愛が賜物として自分に与えられていて、それで兄弟を愛するのです。

パウロが言いました、「ガラ2:20 もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。今私が肉において生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです。」自分は十字架に付けられていて、もはや自分は生きていない。自分を愛して、自分のためにご自分を与えてくださった、御子を信じる信仰によって生きるのだ、と言っています。信仰によって、キリストのいのちが内に宿っていて、その愛によって人々を愛し、兄弟を愛します。ですから、問題は兄弟を愛せないということではないのです。問題は、自分に死に切れていないということです。自分は十字架に付けられていて、もはや生きていないというところに立てないこと。相変わらず、自分の肉の力で何かをしようとしていること。このことが死ぬことによって、初めてキリストの愛で満たされるのです。キリストの愛に満たされているか

らこそ、他者を愛します。

ですから、そのまま告白することが先決です。「この兄弟を、適切に愛せないことを神さま、ごめんなさい。」と言うではありません。「この兄弟のことが、大っ嫌いです！罪を犯しました！ごめんなさい、神さま！」そして、心を清めていただき、神さまに満たされ、神のものとして愛します。聖霊が助けてくださいます。

そしてヨハネは、「**愛がある者はみな神から生まれ、神を知っています。**」と言っています。この「神を知っている」というのは、体験的な知識、ギノースコウです。愛しているということによって、その人は神を体験的に知っているということです。自分がどれだけ神を知っているのか？それを測る物差しは、自分がどれだけ愛しているのか？ということです。私たちはとにかく、自分が知的に聖書の教え、神の教え、教理というものを知ってから、それから実践ができると思っています。そういうこともあります。けれども、行うことによって神を知るということがあります。信仰によって命じられていることを行っていて、神が自分の内におられることを知ります。「知ってから行う」のではなく、「行ってから知る」ということです。なので、ここでヨハネは、「**愛がある者は、..みな神を知っています。**」と言っています。これは正確には、「**愛している者は、みな神を知っています。**」となっています。能動的に愛しているというところで、神を体験的に知る恵みがあります。

2B 神の本質 8

⁸愛のない者は神を知りません。神は愛だからです。

ここも、「愛していない者は、神を知りません。」が、もっと直訳です。これは、偽りを見抜くよい物差しです。神を知るということが、口先だけのことになっていることが明らかになるからです。しばしば、神の知識を使って、人を愛さないでいることがあります。ユダヤ人たちがイエス様に、「私たちの父はアブラハムです」「私たちにはひとりの父、神がいます。」と言いましたが、彼らは、この方を石打にしようとしたのです。殺そうとしたのです。憎しみや殺意があっても、神を父として知っているという事ができるのです。むしろ、そうした知識によって、自分が神からではなく、悪魔からそのような憎しみを抱いていることが見えなくなってしまうています。

そして、とても大事な言葉が、「**神は愛だからです。**」であります。これは、神には愛があるという、属性ではありません。性質ではないのです。本質なのです。例えば、イエス様は父なる神のことを、「神は霊です(ヨハ4:24)」と言われましたが、神が霊ということがあったり、なかったりするのではなく、神は霊なのです。それと同じように、神は愛なのです。愛から神は離れることはできないし、神が愛さないということはありません。

しばしば、私たちは聖書を読んで、神は移り気が多いと勘違いしてしまいます。ある時には良くし

てくださるのに、またある時には怒りをあらわにされる方だと。神が裁かれる時は、神は愛するのを控えられると。これだと、まるで家庭内暴力、DV のような、ある時には甘い言葉をかけて、そしてまたある時に暴力的な言葉をぶつけて、心理的に操作する夫のようにさえ見えてしまいます。いいえ、そうではありません。それは、私たちが神の愛に対して信頼が完全に寄せられておらず、自分の閉ざされた心が、神のなされていることをそのように見えているにしかすぎません。神は変わらない方なのです、「ヤコ 1:17 父には、移り変わりや、天体の運行によって生じる影のようなものはありません。」

ある兄弟が、カリフォルニアにあるカルバリーチャペルの聖書学校に通っていて、私に興味深いことを分かち合ってくれました。レポートを書かなければいけないのですが、そのテーマが、「御怒りの中にある神の愛」なのだそうです！これはすごく深いと思いました。私だったら、どう書くか？と思いました。一つは、神は御怒りをご自身が望んで行われたい。御怒りを現わすことは、最も行いたくないことだ。しかし、表す時には、その者たちの罪のゆえ、強いられて表すのだ、ということ。そして次に、御怒りには、彼らがへりくだり、悔い改めて、主に立ち返ることを期待して、そうされているということです。

私たちが、信仰を捨てず、最後まで走りぬくその秘訣は、こうした神の根本真理を知っているかどうかにかかってくる。神は慈しみ深く、愛に満ちたお方です。たとえ、自分がつまずきそうになり、主に仕えることが空しく感じるようなことがあっても、それでも立ち返ることができるのは、神が良い方である、愛であることを知っているかどうかにかかっています。神殿の賛美を導いたアサフという人がそうでした。「詩 73:1 まことに、神はいつくしみ深い。イスラエルに、心の清らかな人たちに。けれどもこの私は、足がつまずきそうで、私の歩みは滑りかけた。」と告白しています。けれども、彼は立ち直りました。この、神のいつくしみ深さを知っていたからです。

2A 御子の派遣 9-10

このようにして、兄弟を愛するのは、神が愛であり、神の愛が、神から生まれた者にあるからだという事です。そして次に、では、その愛を神はどのような形で表したのか？を見ていきます。

1B いのちの付与 9

⁹ 神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちにいのちを得させてくださいました。それによって神の愛が私たちに示されたのです。

私たちが、神が自分を愛しているのかどうか、分からなくなったという時、この 9 節と 10 節の言葉を思い出してください。

一つは、「そのひとり子を世に遣わし」ということがあります。父が独り子を遣わすというところ

に、大きな愛が表れています。父は、子を自分のところに置いておきたいものです。ヤコブのことを思い出します。ヨセフを失ったヤコブは、飢饉がやってきた時に、兄息子たちをエジプトに遣わし、穀物を買うように命じました。ベニヤミンは、自分のところに置いておいたのです。ヨセフがいなくなったように、もしやこの末の子、ヨセフと同じ母ラケルから生まれた子に、もしやのことがあったなら？と思ったのです。ところが、そこのお代官様は、実はヨセフ本人でしたが、末の弟を連れて来なければ、二度と顔を見ることはできないと言いつけました。けれども、穀物は尽きます。それで、息子の一人ユダが、自分が保証人になるので、どうか連れて行かせてほしいと願い出ます。ヤコブは、「創世 43:14 私も息子を失うときは失うのだ。」と覚悟を決めて、ベニヤミンを送ることを許します。自分が死ぬこと以上に、息子が死ぬことはあってはならないこと、それだけ父の愛は深いです。ですから息子を、しかも独り息子を世に遣わすというところには、父なる神のただならぬ愛があります。

そして、独り子を遣わされた、受け手のほうも愛を知ります。遣わされた者は、遣わした者を代表して来ています。その権能、力、位を携えてきます。御子が遣わされるということは、父なる神ご自身が来られたということと同じだったのです。イエス様は弟子ピリポに対して、「わたしを見た人は、父を見たのです。」と言われました(ヨハ 14:9)。

私は、高校生の時に初めて、教会に行きました。英会話教室でした。そこにアメリカ人の宣教師がいました。その時は心で、蔑んでいました。けれども、信仰を持って、しばらくしてから、「彼らが、わざわざ自分の故郷を離れて、生活の基盤を捨てて、ここに来ている理由が、ただキリストの愛を伝えに来るということなのだ。その動機だけで、ここに来ているのだ。」と分かった時に、とてつもない尊敬が生まれました。宣教師たちに、私は、キリストご自身を見ました。そこまでの犠牲を払うことのできるの、その人の願いや意欲では到底、できない。ただ、キリストがその人を遣わされたからなのだ。だからこの人たちを見れば、キリストのお姿が分かる、と思いました。

そして、「**その方によって私たちにいのちを得させてくださいました**」とあります。私たちが罪の中で死んでいたけれども、キリストがよみがえられたことによって、私たちを生かしてくださいました。主が言われました、ヨハネ 11 章 10 節です。「盗人が来るのは、盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするためにほかなりません。わたしが来たのは、羊たちがいのちを得るため、それも豊かに持つためです。」そして、どのようにして私たちにいのちを与えるかというと、11 節に、「わたしは良い牧者です。良い牧者は羊たちのためにいのちを捨てます。」とされています。ご自身が犠牲を払って命をお捨てになり、それで、よみがえられて私たちに命を与えられたのです。私たちは罪の中で死んでいましたが、イエス様がご自身のいのちを献げ、私たちを生かしてくださいました。

明日は、東日本大震災の 10 周年です。今日、米軍のトモダチ作戦の動画を見ました。地震が起こり、津波が押し寄せたことを知った彼らは、世界で航行している自らの戦艦を急遽、日本に動

かしてきました。そして、そこからヘリコプターを使って、救援物資を各地に運びます。拠点となる、仙台空港が水浸しで使い物にならなかったのも、まず空港を回復すべく、空軍がそこに向かい、残骸を撤去しました。残された人々がこれ以上死ぬことがないように、犠牲を払っていく姿には、いつも感動します。私たちは、全世界を造られた神がご自分の独り子を遣わされて、私たちが生きることができるように犠牲を払ってくださった、人間の歴史におけるもっとも大きな救援活動を忘れるべきではありません。ここに愛が示されています。

2B 宥めのささげ物 10

10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。

ヨハネは、とても大事なことを強調しています。「**私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し**」とあります。私たち人間の中の愛は、「互惠関係」とも言えます。相手が苦しんでいる時に助け、また自分が苦しんでいる時に助けてもらう、という関係です。今、お話ししたトモダチ作戦も、当時の在日米大使は、米同時多発テロの時に日本が現場に救援隊を送ってくれた、そのお返しだと言いました。こうした友愛は素晴らしいことです。けれども、それを神の愛に当てはめてはいけません。神が私たちを愛したのは、私たちが神を愛したからではないのです。神が私たちを愛して、私たちが応答として神を愛しますが、その逆はないのです。いつも、いつも、神がまず先に私たちを愛されました。そして見返りを全く期待することなく、神がただ愛だから、愛されていることに気づくことにより、そこに愛があると知るのです。

時にキリスト者の中で、「神さまに愛してもらうために、もっと神さまを愛したい」という人がいます。これは大きな間違いです。神の慈しみは尽きることがありません。そのから出て来る愛のみで、私たちは神を愛し、隣人を愛するのです。あくまでも応答です。これは、聖書全体に貫かれてることです。神が人のために行われ、人は神に応答するのみです。聖書は、「はじめに、神が天と地を創造された。(創世 1:1)」から始まるのです。それから人が応答するのです。聖書のどこにおいても、神が行われたことが始めに書かれており、それからこれこれをしなさいとあります。神の恵みを知ることなくして、良い行いは一切できないのです。

それを、私たち人間は、絶えず自分の行動のほうに目を留めます。これも、罪の結果とも言えます。裸であることが分かって、アダムとエバが行ったことは、自分自身で覆いを作ったところから始まっていますから。だから、「こうしなければいけない」という自分の行いを中心に考えるのです。それから、神を考えるので、自分の行いによって神に借りを作れる、神が応答すると考えるのです。しかし人が神に借りを作るようなことは、一切できません。「ロマ 11:35-36 だれがまず主に与え、主から報いを受けるのですか。」36 すべてのものが神から発し、神によって成り、神に至るので。この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。」

そして、ヨハネは、「**私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされました。**」と言いました。ここに愛があると言っています。なぜ、私たちがこの方にあっけいのかと与えられているのか、生きているのかと言いますと、神の御怒りがこの方にあっけい満たされたからです。「**宥めのささげ物**」とありますが、これは大祭司が年に一度、民のために血を至聖所に携えて、血を振りかける場所の、宥めの蓋のことを元々は指しています。聖なる神は、罪のある者たちをそのまま受け入れることは決してできません。近づくものなら、たちまち死ななければいけません。この方には、罪に対する御怒りを満たすことが必要なのです。それは怒っている人を宥めるような、宥めではありません。罪に対する正義が完全に満たされたという意味での宥めです。10年懲役の刑が処せられたら、しっかりと10年の服役を終えて、完全にその刑罰を満たして出所するようなものです。そうすることによって、初めてその人は社会に受け入れられることとなります。同じように、神は、罪ある者を受け入れるために、あえて御子を宥めのささげ物とされて、そこにおいて宥めを行われ、そして私たちを受け入れられます。

私たちを生かすために命を捨てられたというところにも愛が示されていますが、さらに私たちの尻ぬぐいをご自身で行われたと言ったらよいでしょうか、正義を満たされたところに愛があるのです。厳格な裁判官のところ、法廷で、息子が罪を犯して連れて来られて、法律で許される限りの最も厳しい罰金を課したとします。その裁判官は法服を脱ぎ捨て、息子のところに行き、今度はこう宣言します。「この罰金は私がすべて支払います。」ここに愛があります。